

祭事組織構造と集落の現状

—和歌山県・奈良県の事例から—

奈良女子大学 村上弥生

祭事を執り行う組織としては一般に宮座が知られており、また講組織というものもある。近畿地方の村落には宮座的構成を持つところが多いという特徴があつて、多くの研究がなされてきた。宮座には一部の特定層のみが加入しうる株座と、氏子総てが加入しうる村座という分類があるが、基本的には階層的性格を持つものといえる。

これに対し、基本的に任意に組織化されるとする講組織がある。これは宮座のように宗教的機能を持つものだけではない。柳田國男の指導のもとに行なわれた山村調査の報告書『山村生活の研究』の中で守隋一による「部落と講」では、①一般的な講（村組織の講）、②代參講、③特殊職業者の講、④女の講、⑤老人・青年・同齡者の講のような分類がなされている。講集団についての総合的な研究を行なった櫻井徳太郎によれば、講においては、政治的・社会的な機能、経済的な機能、信仰的な機能など多くの機能を持つ活動が行なわれるとされている。ただし、その中心的機能はやはり信仰的機能であるとされる。櫻井によれば、講集団の分類はさまざまになされているが、その一つの合理的な分類として、和歌森太郎の協同体理論を利用するものがある。それによると協同体には、家族・親類という本然的紐帯によるもの、つまり血縁によるもの、部落・町村のような地縁によるもの、そして任意的有意的人為的協同による心縁的協同体というものが規定されている。

本報告で取り上げる対象地は和歌山県、奈良県の山間地域にある集落である。近畿地方の村落としての特徴を持っているといえるが、小字となっている集落単位で見ると、近傍に位置するにもかかわらず、祭事組織のあり方はその様相をかなり異にしていることが見られる。また、各集落の現状にも大きな差があることにも注意をひかれる。

和歌山県かつらぎ町の滝集落と西大久保集落は、旧村時代からのまとまりである四郷地区とされる地域の中にある。この地域では山腹を利用しての果樹等の栽培が行なわれてきたが、現在、その高度を利用しての串柿生産が盛んとなっている。滝集落と西大久保集落について現状を見ると、両集落とも串柿生産が行なわれているものの、西大久保集落の方が生産が盛んであり、二世代、三世代同居が多く、若い後継者が活動しているということになっている。両集落内の祭事組織のあり方は、滝集落では長老が中心となる宮座組織が重要なものとなっており、西大久保集落は集落内の地理的区画による分け方での講組織を中心である。

これらの集落例に関して、先に上げたようなさまざまな分類の軸、規準についての考察を行ない、そこから考えられる集落内の祭事組織の構造と集落の現在のあり方との連関性を分析する。